普段着のわたしたち

４月２４日に総本山光明寺へ名古屋の寺院合同での団体参拝へ参りました。法然上人御忌法要です。

最近大切な行事に高確率で雨に降られる雨男な私ですが、道中雨に振られましたが、京都では大丈夫でした。

ご加護でしょうか？　征阿

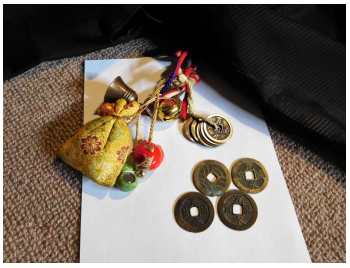
５月某日、檀信徒の皆様がたと総本山光明寺東京別院へ一泊二日の小旅行。二日とも富士山が裾野まで丸見えという、ありがたいお天気に恵まれました。二日目に立ち寄った本栖湖芝ざくらまつりの景色。日本人は富士山を目の当たりにすると、なぜこうもテンションが上がるのでしょう！

いや、日本人ばかりではない。芝ざくらまつりの会場は外国人旅行客が多かった気がします。英語、中国語、韓国語他あちゃらの言葉が乱れ飛び。日本が観光立国になったのだと実感しました。　訶梨帝母

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

「男だったら女じゃないよぉ～♪」と道で知らない酔っ払いのおじさんが少し誤りのある『銭形平次』の主題歌を歌っているのを聞いて、ふと思いました。

銭形の親分が銭を投げ！投げ！ 16 人の犯人を逮捕すると、当時 16 文であった「かけ蕎麦」が食べられたことになります。１文が現在の約 20 円ですので 320 円です。私の記憶する限り親分の命中率、検挙率は共に 100 %ですので、この計算で良いと思います。私もお参り先で行き倒れても良いように法衣の袖下の匂い袋と共に１文銭を６枚常にぶら下げております。



ちなみに写真の少し大きめの銭は４文銭(80 円)です。現在であれば親分の銭も必要経費で落とせますので、破壊力の増す４文銭をお使いになった方がようございます。　俊徳丸

気がつくと、門脇の吐水龍にウエディングヘッドドレス ボタニカルナチュラル ヘアーアクセサリーがかぶせられていました。

境内へ遊びに来た子どもが八重桜を摘んで頭に載せたのでしょう。この発想にはマイッタ。怖い顔をして口を開けている龍が、子どもの目には雌に見えたのか、それともゲイに見えたのか・・・。　迷走坊

鉄道稲荷

毎年「母の日」は、私のお寺境内にお祀りする「泉養稲荷社」の大祭『きつね稚児行道』が行われます。健やかな成長を願い 100 名の子供たちが稚児衣装を身にまとい、顔はかわいらしく「きつねメイク」、頭に「きつねのお面」をのせ、白い尻尾をつけてお練りをいたします。若いお母さん方は「稚児の後ろ姿が可愛過ぎてたまらない！」と言ってそのポーズで熱心に写真を撮っておられます。当日私も法衣に尻尾をつけ「きつねメイク」で臨んでいすが、「和尚さんがすると古だぬき稚児や！」と言われてしまいます。

お稲荷さまは人が大勢集まると大変お喜びになられます。「100 名と言わず、もっと稚児を集めろ！」と言われます。大きな声では言えませんが、佛と違って神さま系の方々はわがままで御守がたいへんです。そういう時は、「これ以上人が来ますと当寺の駐車場は満杯になってご近所に迷惑になります。できません」と、出来ない事は出来ないとはっきり断って話し合いで納得していただきます。こういうやりとりの仕方は代々私の曾祖父から受け継いだものです。これが出来ないと御守役は命を取られることもありますので、御祈祷に臨む時などは背筋を伸ばしてお稲荷さまと慎重に話し合いを重ねなければなりません。

当寺の「泉養稲荷」は、地元では通称「鉄道稲荷」と呼ばれています。明治 22 年に旧国鉄「東海道線」が愛知から岐阜にかけて開通しました。私のお寺の前ではそれに伴う木曽川の鉄橋建設工事が開通に向けて急がれていました。すると、ある日から工夫さんが鉄橋から川へポトンポトンと毎日一人ずつ転落します。引き揚げてみますとどこにも怪我もしていません。無事です。しかしそれが毎日続くものですから工夫の親方が当寺住職であった曾祖父に相談に来たそうです。親方からその状況を聞いた曾祖父は、そのお告げ的なる振る舞いからすぐにお稲荷さまの所へ向かいました。お稲荷さまは人の集まる賑やかさは好まれますが、特に金属から発する騒音などは嫌われます。「静寂」がお好きです。曾祖父は「これから日本にとって鉄道がどれだけ重要で、開通後も民のために御辛抱くだされ」と話し合いをしたそうです。

開通２年後の濃尾大震災で、長良川の鉄橋は崩壊しましたが、木曽川の方はビクともしなかったそうです。それがまた評判となり「鉄道稲荷」と通称されるようになりました。　俊徳丸

この五月、周囲で「令和の子」が二人誕生しました。

出産したのは義妹と知人。いずれも四十一歳、第二子目。片や自然分娩、片や帝王切開。いずれも母子ともに経過は順調。ですが、自然分娩の母は出産中のイキみから生じる「痔」でまっすぐ座ることもままならず、授乳の際にも苦しんでいます。彼女は第一子出産時に痔になり（よくあるケースだそう）、数年間時々顔を覗かせる痔の恐怖に日々怯えつつ、今回の周産期でも案の定ヤツは暴れだし、出産時に爆発したそうです。「痔の持病があるので今回は帝王切開で・・・」との希望は病院に受け入れられず、今後も痔との戦いは長く続くのでしょう。一方、帝王切開の母、出産後の三日は起き上がるのも辛いほどの痛みだったそうですが、今はケロリとして元気に育児をしています。

帝王切開による出産は世界保健機関（WHO）が警鐘を鳴らすほど増えているのだとか。特に先進国は帝王切開率が高く、妊婦側より医療機関側の事情も多。予定が立たず、時間もかかる自然分娩より、予定が立ちパッとオペが済む帝王切開を提言するそうです。中国、韓国にいたっては世界最高水準の帝王切開率で、こちらは妊婦側の「縁起の良い日に産みた～い」「スタイルを保ちた～い」「痛いの嫌～」などアジアンセレブの発想と、病院側の「医療費が高い帝王切開へ誘導」の思惑が合致。アラオソロシヤ。今に「生」も「死」も調整、予約するのが当たり前の時代に。オソロシキコトこの上なし。

こもりうた53

幸い日本は19%。WHO推奨は10～15%だそうで、先進国の割にはまずまずといったところでしょうか。

古来、日本人は普通分娩美徳意識が高く、腹キリまでしたのに姑に嫌味を言われ、涙を飲んだ嫁たちもおられましょう。医学的には産道を通ろうが通らまいが、その後の子どもの成長には関わらないのだとか。ただ、助産師の中には「私の力で自然分娩させてみせる」という職業意識の高い熱い方がおいでのようで、痔の彼女の「帝王切開のお願い」は一蹴されました。「あの産院は医師より助産師の力が強かった。結果私はまた痔になった」と泣いていたので、この場合のお願いは聞いてあげて欲しかったと思う次第。しかし、日本の医療機関が他国に比べて健全だということには安堵します。

二人の出産よもやま話を聞いて、懐かしく六年前の自分の母子手帖や診療明細書を眺めておりました。ご承知の通り、出産は病気ではないのでほぼ実費（自治体による）。さらに私の場合「ハイリスク分娩管理加算」なる項目が。当時気づかなかったので改めて調べると四十歳以上初産などの妊婦に課せられる、と記。

少子化対策とか言うならその辺オマケしていただけないものでしょうかねぇ。

訶梨帝母

大伴旅人

令和という元号が『万葉集』の中の文に使われた文字を組み合わせて考案されたことは発表当日の官房長官によって説明されました。そして、その文が、梅の花を愛でる宴で詠まれた一群の歌に対する前書きの中に含まれていることも一緒に説明されました。この宴は、太宰府の長官であった大伴旅人（おおともの たびと）の邸で催されたものであることは、その前書きに述べられています。

『万葉集』の歌に付けられたこういう前書き、あるいは序に当たる文を題詞といいます。題詞には、歌の作者やその歌が詠まれた事情などが述べられることがありますが、この宴のときに詠まれたとされ、万葉集に収録されている歌は三十二首、つまり、旅人を含め三十二人がここに集い、梅の花に寄せる歌を詠んだのでした。この中に防人（さきもり）はいなかったようですが。

この三十二首の題詞には、この宴がいつ催されたのかも述べられています。天平二年（730年）正月十三日、旅人が65歳の時でした。その時彼が詠んだ歌は、これです。

わが園に　梅の花散る　ひさかたの
天（あめ）より雪の　流れ来るかも（822）

（ひさかたのは天にかかる枕詞です。また、歌の後の番号は、『万葉集』収録歌の通し番号です）

我が家の庭でウメの花が散っている、空から雪が降り注ぐようだなあ、というような意味でしょうか。おそらく漢詩に想を得て詠んだ、わかりやすい歌です。花が散る、とのことばから、この歌に寂しさを読み込む向きもあるようですが、梅の花が散るのは雪のような美しさを思わせる情景であり、寂しい印象はありません。大伴旅人は感情を素直に表現しました。

直截（ちょくせつ）に深い悲しみをうたった、こんな作品があります。

世の中は　空しきものと　知る時し
いよよますます　悲しかりけり（793）

（いよよはいよいよです）

いよよますますと重ねて、心の底からの痛ましさを表出しています。世の中は空しきもの、という認識は佛教の心ではないかと考える人もいます。この歌は、60歳を過ぎて太宰府に赴任して、その地で妻を亡くした旅人への弔問に答えて詠んだものだと題詞に述べられている歌です。

梅の花を詠む宴のあったその年の冬、天平二年（730年）の十一月、旅人は、臣下として最高位の官である大納言に任じられ、大宰帥を兼任のまま、京へ戻ります。

奈良の大伴邸に還ったときの歌です。

人もなき　空しき家は　草枕
旅にまさりて　苦しかりけり（451）

（草枕は旅にかかる枕詞です）

だれもいないがらんとした家に住むのは、太宰府からの道中の苦しさよりも身にしみることだ、とここでは妻のいない寂しさを苦しいということばで表現しています。

大陸、朝鮮半島からの侵攻に対し、九州防衛、ひいては日本防衛の先頭に立って防人を率いた将軍大伴旅人は、帰京の翌年、病に倒れ66歳で死亡します。望郷の念、家族への思いをつのらせる防人に、歌を指導したのは、その心を知る大伴旅人だったかもしれません。

（散歩道）

『私説法然伝』（５３）

陰謀術数②

先月号では平家政権のパワーバランスの崩壊と院の近臣と比叡山延暦寺との争いについて書きました。今月号はその続きについて書きます。

【院の近臣と比叡山延暦寺との争いに関して後白河帝の出した答えは「妥協」であった。当初は騒動の張本人の師高・師経兄弟の弟の師経の処分だけで済まそうとしたが、それが比叡山延暦寺の反感を買い、警備の任に当っていた平重盛の配下と延暦寺の僧徒・僧兵との間で争いが起こり、死者を出す騒ぎになった。後白河帝が延暦寺の要求を飲まなければ騒動が収まらなくなってしまったのである。結果的に後白河帝は延暦寺の要求を飲まざる負えない状況になり「妥協」して延暦寺の要求を一度は飲んだ。その後に安元の大火が発生したのだが、その混乱期に突如として後白河帝は検非違使に天台座主明雲の捕縛を命じる。拘束され移送されていた明雲だが、延暦寺の衆徒によって奪還されてしまう。これに激昂した後白河帝は重盛・宗盛兄弟に延暦寺攻撃を命じるが、重盛・宗盛兄弟は事態の重大さに判断ができなくなり、福原にいる清盛は急遽京へ戻ることになった。後白河帝に攻撃の中止を説得するも失敗。各地の兵力を集め延暦寺攻撃の準備がなされていた安元三年（一一七七年）六月一日に清盛に平家打倒の陰謀があることが密告される。

この陰謀は京都鹿ヶ谷山荘（『平家物語』には俊寛僧都の山荘とあり慈円の『愚管抄』には信西入道の子の静賢の山荘とある）にて謀議がなされた事から「鹿ヶ谷の陰謀」と呼ばれる。後白河帝の院の近臣で重盛の妻の兄である藤原成親や西光らによって平家打倒の陰謀が計画された、と伝えれるが真偽は諸説ある。清盛は密告を聞いた後に西光を呼び出し拷問にかけ自白させ斬首し、成親は重盛の願いもあったのか流刑、その他の謀議に加わった面々も捕縛された。これにより院の近臣は全滅と言ってもよい状況となる。それは後白河帝の実権が弱まり、結果的に平家政権が政治の主導権を完全に掌握することになった。しかし後白河帝と平家一門との対立は決定的なものとなる。さらに清盛の後継者であり平家一門の棟梁でありながらも院の近臣でもあった重盛の立場は、身内であった成親の裏切りによって完全に崩壊してしまった。平家政権と後白河院政とのパワーバランスを最後の薄皮一枚でつなぎとめる事ができた唯一の人物が事実上の失脚状態になることは今後の政局と平家一門の行く末をも左右する事でもあった。】

「鹿ヶ谷の陰謀」と呼ばれる一連の事件ですが、『平家物語』や『愚管抄』に仔細が記されています。『愚管抄』の著者であり同時代を生き抜いた慈鎮和尚慈円は明雲の下で受戒しており、天台座主の座も受け継いだ人物です。摂関家の出で一流の教養人で現実主義的な思考の慈円は「一定の説は知らねども」と陰謀の真偽については確認したわけではないという立場を記しているのが印象的です。

以下次号に続く（征阿）

地獄　本当は怖い世界

車が園児に突っ込む事故が頻発しています。正に交通地獄です。

平安時代中期、比叡山横川の恵心院に隠遁していた源信僧都は、寛和元年（985 年）『往生要集』を著し、人々に穢土の六道を厭い離れ、極楽浄土への往生を欣い求めるよう勧めました。さらに、この記述に基づく絵画が制作されて貴族から庶民にまで大きな影響を与えたのです。今日でも、日本人の地獄観はここに由来します。

『鬼灯の冷徹』は子どもに大受けの抱腹絶倒のギャグ漫画で、拙寺も本堂に置いています。ここに源信僧都が典拠とした『正法念処経』が換骨奪胎して出てくるのです。

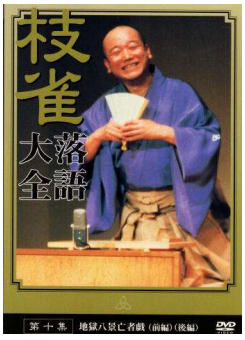
明治から昭和の初めにかけて大いに流行した大道芸が「のぞきからくり」。出し物の「地獄極楽」に使われた 6 枚の絵が、大阪歴史博物館に移されて現存しているようです。四天王寺の縁日で口演していて引退された黒田種一さんがさわりの部分演じる様子を、幸いに YouTube で観ることができます。

5 月 12 日に逝去した京マチ子さんを偲んで『地獄門』（昭和 28 年制作）の DVD を観ていますと、古ぼけた門の壁に描いてある地獄絵が何度も映されます。遠藤盛遠が人妻である袈裟御前へのストーカー行為が高じて殺害する内容ですから、現代にも通じる題材。

佛教系の幼稚園にほぼ置いてあって、園児に一番人気の絵本が『じごくのそうべい』です。曲芸師のそうべいが医者、山伏、歯抜き師と一緒に閻魔大王から地獄に落とされる筋書き。昔なら老人が孫に語って聞かせた地獄の話を、今は親が子どもに読み聞かせるわけです。但し、セリフはコテコテの大阪弁ですから関西以外の方にはちょっとイントネーションが難しいかも知れません。

この本は、三代目桂米朝師が作った上方落語の大ネタ『地獄八景亡者戯』の最後の部分を子ども向けの絵本にしたものですから閻魔さんも鬼もぜんぜん怖くありません。

元ネタの落語の方は上方落語の真髄が凝縮されています。つまり全編アホらしい話の連続。米朝師から継承した演者が世相や事件、得意芸をてんこ盛りにして語るので、もし源信僧都が聴いたら絶対に怒ると思います。『往生要集』を下敷きにしながら、尊くも有り難くもなく、地獄を厭うどころか、そんな地獄ならいっぺん覗いてみたいと思わせるからです。



以上、好きな地獄のご紹介でした。迷走坊

観経物語（１３０）

者闍会分（ぎじゃえぶん）

《本文》

爾の時、世尊は足は虚空を歩みて、耆闍崛山に還る。爾の時、阿難は広く大衆の為に、上の如き事を説く。無量の諸天及び龍・夜叉も、佛の説く所を聞き、皆大いに歓喜し、佛に礼拝して退けり。

佛の説ける観無量寿経。

《意味・訳文》

その時、世尊は虚空のうちに足を運びながら、耆闍崛山に帰られた。そこでお供の阿難はただちに大比丘衆のために、（王宮会でのこれまでの出来事や）佛の教説を、佛の説かれたとおりに復説し説明した。

（耆闍崛山に残って修行を続けていた多くの比丘たちは勿論）無量の諸天および龍・夜叉（＝毘沙門天の眷属）までもが、阿難が伝えた佛の説くところを聞き、皆領解して大いに歓喜して佛に礼拝して退いたのであった。

以上、釈迦牟尼世尊が未来の衆生らに説きたもうた無量寿佛（＝阿弥陀佛）自身と、その御佛をとりまく聖衆や国土のありさまを具体的に自己の心中に現出させ観想する方法と、来世での利益を説く面と、あわせて観想の能力が劣った者、無き者の為には、佛の名を称えることで、滅罪し、見佛して往生させる面の両面があるように説き、しかも最終的には、すべての衆生が佛力（＝他力）に帰して、念佛往生することを顕す教えを説き終わる。

《私訳》

ここで《流通分》のほかに《耆闍会分》を付け加えてあるのはなぜだろうか。内容的に見れば《耆闍会分》は《流通分》に含めておいてよさそうなものです。考えられるのは、《流通分》において釈尊は阿難に対し佛のこれまでの説法を未来の衆生に伝説せよと指示されているのですからそこで話は終わりのはずです。《流通分》の段階で阿難は耆闍崛山に戻ったら《流通分》までの事を復説するのが通例でしたから《伝説》は予測はされていましたが、確実とは断言できません。そこで《耆闍会分》を付け加えることによって阿難の復説、すなわち《伝持》に誤りがないことが証明され、それによって《未来の衆生》にも確実に誤りなく伝えられていることが保証されたわけで、実際に今の私達も知ることができたわけです。それから末語の本経典の名前は短いものですが、これだけ深い意味が隠されていることを記してみました。観経は最初にも書きましたが、複雑に話が入り組んでいて、字面を追うだけでは話が繋がりませんし、意味するところも探り出せません。右往左往しましたが、何とか終了させることができました。長い間お付き合いしていただきましてありがとうございました。

《妙星斎》